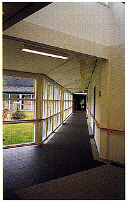
世界の街角から

鎌田貴子
デンマーク王立美術アカデミー建築学校　在学中

さて、前回までいろいろな形のデンマークのバリアフリー（ハード面だけでなくソフト面でも）の例、そしてその背景等についてお話ししてきましたが、今回はまた別の取り組み方・工夫についてお話ししたいと思います。

建築・都市計画においての人間の感覚利用・見直しについてです。このことはたぶん最近各国で言われるようになり、日本でも例が見られるでしょう。

障害者も健常者も共に安心して過ごせる空間


Fuglsangcentret の廊下。
中庭・午前の塔からの光で明るい。

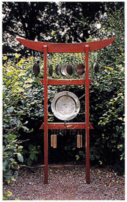
一九八九年に創設された、Fuglsangcentret（Fuglsangとは〝鳥の歌〟の意味）。ユトランド半島のフレデリシアという街の郊外にあるこのセンターは、デンマーク視覚障害者ファンドによるコース・休暇センターです。建物は視覚障害者が容易に方向感覚が得られ、簡単に歩き回れるように考慮されています。この方向感覚が得られ、自分が一体どこにいるのかが容易にわかるというのは、視覚障害者だけでなく健常者にも安心感を与えます。ジグザグ型をした平屋のこの建物の曲がり角には大きな明かり取りの窓（塔）があり、中庭を散策しているときの目印になっています。この塔は内側では、廊下を歩いてきて角になると明るさが変わる、音の響きが変わるという働きをします。その上に床の素材も、廊下の部分は表面が滑らかなダークブルーのタイルだったのが、この塔・入り口ではぼつぼつのある明るいグレーのタイルに変わります。このように視覚障害者のため、いくつもの工夫がなされています。

この廊下のタイルも他の場所（レストラン・客室・アクティビティルーム等）では木のフロアに変わります。視覚・聴覚障害者の人がバイブレーションによって人が近づいてきたかどうか、わかるようにするためです。もちろん木のフロアの方がアコースティックの面で優れていることも含まれています。

人によって心地よい明かりの強度が違うので、あちこちにライトコントロールが備え付けられています。建物回り・中庭には多種のペイブメントが用いられ、ラベンダー等の匂いの強い花が植えられ、これも人々のオリエンテーションに一役買っています。廊下にはさまざまなアートが飾られ、鳥籠もあり、小鳥の歌が聞こえます。計画された工夫とはいえ、さりげなく、少しも施設のような雰囲気を感じさせません。建物から続く小道を辿っていくと小鳥のさえずる森にやってきます。プールも備えられたこのFuglsangcentret。コースに、休暇に、と一般健常者・ファミリーも多く利用しているようです。

自然の素材が五感に優しさを誘う

もう一つ、おもしろい例を見てみましょう。


Sansehaven
木々の茂みには、いろいろな彫刻が置かれている。
これは触ると音が楽しめるもの。

コペンハーゲンの街には幾つかの大きな公園がありますが、その一つにFaelledparkenがあります。この公園自体は一九一〇年頃に設立され、サッカー場も含む大きなものですが、その一画に一九九六年Sansehaven（Sanse＝感覚、haven＝公園）が開園しました。中の小道はぐるぐる曲がりくねり、さらに小さな空間を生み出しています。

さまざまな木が植えられ、その間に遊具が見え隠れします。茂みごとに彫刻等が置かれていて、思わぬビックリが待っています。小道は曲がりくねっていますが、障害者でも安心して通れるよう考慮され、境界線が柵・石でしっかり作られています。この公園は普通に自然の中で遊ぶのが難しい、重度の障害を持つ子供たちを対象に作られました。そういう子供たちにとって大切なことは、残った感覚を使い、伸ばすこと。そのために触れる彫刻は石・木でできていたり、音を出すようになっていたりしています。幾種もの匂いの強い花・刺のある針葉樹・柔らかい葉をつけた広葉樹。水を湛える噴水。大きな岩、細かい砂。それらは全て五感に訴えるように用いられています。このようなSansehavenという試みはここデンマークで最初のものですが、日常的に誰にでも利用されていて、近くのナーシングセンターにも利用されています。

Fuglsangcentret
屋根と同じ黒のタイル壁。
青い塔、入口が目立っている。

障害者・健常者という表現をもう一度考えるべきだと思います。

ここでは全て自然の材料が使われていて、五感に優しいように考慮されていますが、反面それらは半永久的なものではなく、当然メインテナンスにも手がかかります。しかしそれも、自然の物は時とともに朽ちていくということを学ぶ場ともなります。

五感に優しい環境こそがバリアフリー

障害者に限らず、健常者も毎日の生活に追われ、ストレスのため病気になることが多い現代です。この障害者・健常者という表現さえおかしいように思われます。毎回お話ししていることですが、私たちは皆老いていきます。事故に会うことも病気になることもあります。女性なら妊娠することもあるでしょう。誰もが少しずつ、あるいは一時的に世間の定めるスタンダード、〝健常者〟からずれてしまう可能性を持っています。

Sansehaven
曲がりくねった道・木々は、
かくれんぼにも最適。

ですから繰り返して言うように、Barrierfree for allという考え方が必要な訳です。そうしてストレス・事故・病気という良くない状況を未然に防ぐ、招かないようにする、起こってしまった場合にはそれ以上悪くならないようできるだけ食い止めようとすることです。

そのために五感を大事にする、五感に優しい配慮をすることは重要に思われます。都市に暮らしていて五感を磨ける・休める場所、自然の中に行くことが難しくても、少しずつ街の一画などにそういう空間を作ることはできるはずです。デンマークに限らず、このような試みは日本にもあることでしょう。逆に元々日本人はこういう自然を近くに取り込むことがうまい民族でした。風鈴に涼しさを感じ、虫の音に秋を感じる、そういうことのできる民族です。日本にそれを学んだ国はデンマークだけではありません。

あなたの回りでも難しく考えないでできることがあるはずです。

もう一回振り返って工夫をし、自分に優しい、人に優しい環境を作ってみてください。テクノロジーの進んだ現代社会のこと、もっと良い例を作れるでしょう。

望ましくない状況を未然に防ぐ、起きてしまったらできるだけ良い状況にしようとする、これは一つの関連した考え方で、両方が成り立っていなければなりません。

ちょうど食物に気をつけ病気にならないようにするのと同時に、病気になれば医者にかかり、悪くしないようにするようなものです。バリアフリーと言えば、つい後半の部分が取り沙汰されます。これからはもう一歩進んで、トータルに考える必要があります。この二つがごく当たり前になった時、真のバリアフリーも訪れるでしょう。

Fuglsangcentret の中庭。
水を使った楽しい彫刻。
室内にはプールが見える。